第７４号

SOS ニュース

明治の文豪と税のお話
啄木・一葉・漱石

石川啄木

歌集「一握の砂」で代表される啄木は、夭折の天才歌人として知られています。

一方で、啄木の中学の一年先輩である金田一京助との関係では、「人でなし」ではないにしても「ろくでなし」であることは間違いなく、天才歌人と「ろくでなし」、この二つのパーソナリティーからは、とても税の話の要素はないのですが、啄木のもう一つの才能であるジャーナリストとしての天分から、新聞記事や日記には税に関する記述が豊富です。

「・・・第２４回議会に於ける絶対の勝利者は、政府にあらず増税案たり、否、此過酷なる増税を余儀なくしたる厖大の軍事費なり。」明治４１年２月２日：釧路新聞

小樽税務署を訪問した日の日記には「税務署の福本署長は温厚にして風采みすぼらしく」という文学的表現もあります。

樋口一葉

もう一人の夭折の天才といえば樋口一葉。一葉の父は甲州出身の人で、株を買って徳川直参となり、維新後、明治政府に出仕して、東京府の役人になっています。起業家としての意識も高く、不動産業、運送業の設立等の事業にかかわっていました。しかしながら、一葉１７歳の時に父が病没したため、一家の家計が傾き始めます。

母親と妹を抱えた一家の生計を立てるため、下谷竜泉寺町で雑貨店を開いたのが明治２６年８月

「八日晴れ　早朝髪をゆいて八時ごろより・・・東京府庁分署に行く　浅草南元町とて厩ばしのまだ先にけり　印紙料三拾銭半年分税金五拾銭を納めて事ととのふ」

小売業の開業には許可が必要であること、その営業税は府県税であったことが分かります。

日記には開業時の気負いも感じられますが、商売そのものは士族の商法の例にもれず、１０ケ月余りで廃業となりました。しかしながら、この時の経験が不朽の名作「たけくらべ」に生かされることになります。

夏目漱石

一葉の父が東京府に勤務した時の上司が漱石の父親です。その縁で一葉と漱石の兄・大助との縁談が持ち上がりましたが、一葉の父が時々、漱石の父に借金を申し込むことがあり「親戚になったら何を要求されるかわかったものじゃない」ということで、漱石の父が破談にしたそうです。

新宿区の北部に喜久井町という町名がありますが、この町名は夏目家の家紋「井桁に菊」にちなんだものです。夏目家は、町方名主として大変な資産家です。資産家と事業家の感覚の相違が、漱石の父が破談にした理由でしょう。

漱石の後半の作品には、資産家としての悩みがしばしば顔を出していますが、ここでは、所得税の悩みの手紙を紹介します。

漱石は明治４０年に朝日新聞社に入社していますが、その時渋川玄耳に「わが朝日新聞に於いて社員諸君は所得税に対して如何なる態度を取られますか・・・」

渋川に公明正大にと一喝され「蒼くなって急に貴意に従って率直に届ける気になりました。・・・実は今まで教師として充分正直に所得税を払ったから当分所得税の休養を仕るか・・・」

休養という表現が、文学的とも言えますが、振り返れば、消費税８％から１０％への増税が２０１７年４月まで延期されています。このことは、日本経済に対する消費税の休養と言えるのかもしれません。

税務・金融部会　税理士　松下明夫